

## 追悼

前理事長の山田恭暉さんが一年有余の闘病のすえ、2014年6月17日に75年と3ヶ月の生涯を終えました。謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

福島原発行動隊の出発点は、2011年3月30日に山田さんが発した「福島原発冷却系復旧老年決死隊の結成提案」に遡ります。まだこの時点では応急的な冷却設備の設置作業が緒に就いたばかりで、更なる爆発の危険性は予断を許さぬ段階にありました。

その現状に対するベテラン技術者としての危機感、原発による電力を享受してきた世代としての責任感が山田さんを駆って、放射線被曝の害が相対的に少ない高齢者が春秋に富む若い人々の被曝労働の肩代わ



りをするという、前代未聞の着想に至らしめました。

この理念を余人に先駆けて提唱した山田さんが、それに共感して呼応してきた多くの人々の先頭に立ち、福島原発行動隊の本来の目的を実現するために力を尽くし、さまざまな可能性を求めながら初志を貫いて、内外にわたり精力的に活動したことは、皆様のご存知のとおりです。昨年春から病に伏し、第一線から退くことを余儀なくされてからも、山田さんは気力旺盛に行動隊への助言と指導を続けてくれました。

そんな山田さんが薬石効なく身罷ったことは、私たちにとって痛恨の極みであります。緩和ケアに入つて死に備える山田さんの去就は実にみごとなものでした。いまはただ安らかに眠られることを祈念するばかりです。山田さん、お疲れ様でした。

公益社団法人 福島原発行動隊



の目的はよく心得ている答弁とのやりとりは予定の1時間を超え、今後の廃炉事業の動向を知る上でそれなりに意義のある集会を終えました。

来場の国会議員は桜井宏衆議院議員（自由民主党）、牧山ひろえ参議院議員（民主党）、郡和子参議院議員（民主党）。桜井議員からは福島原発事故収束と被災地復興に関する新情報が提供されました。



牧山ひろえ  
参議院議員

桜井宏  
衆議院議員

## ■ 「原賠・廃炉機構」で何が変わるか

以下、山口調査官と相部課長補佐による説明および質疑の中で出された事項をまとめました。

### ●日程

5月14日、参議院本会議で自民党、公明党、民主党などの賛成で可決成立し、21日に公布された。公布後3ヵ月以内の施行ということで、8月中下旬を目処に現在具体的な準備作業を行っている。ただ実際の施行日をいつにするかはまだ確定していない。

### ●会議体を整理した

（乱立していた）会議体については昨年末に一本化することを決めていて、実施されている。具体的には、「廃炉対策推進会議」は「廃炉・汚染水対策関係閣僚会議」に一本化し、機能を統合した。

### ●政府関係の会議体・組織はすべて存続している

（「廃炉・汚染水対策チーム」「廃炉・汚染水対策現地事務所」「汚染水処理対策委員会」「原子力災害現地

## ■ 第32回院内集会を開催しました

5月29日(木)午前11時から第32回院内集会を参議院議員会館B109号室にて開催しました。テーマは、5月14日に成立し21日に公布された「原子力損害賠償支援機構法」から「原子力損害賠償・廃炉等支援機構法」への改正に関する討議です。前回の院内集会で、改組される新機構について説明を受けた経済産業省資源エネルギー庁の山口仁原子力政策企画調査官と内閣府原子力災害対策チーム事務局の相部信宏課長補佐を再度お呼びし、今回は行動隊からのさまざまな質問に答えていただきました形で集会は進行しました。

初めに岡本達思理事から機構改革についての解説と、用意した7項目の質問の説明があり、11時半に予定された二人の担当官の来場を待って、質疑応答が始まりました。延べ10数名からの多岐にわたる質問や要望と、それに応じる両担当官の、ときに猛烈な早口になり、ときに不得要領にもなるけれど、福島原発行動隊

対策本部」「汚染水対策現地調整事務所」など既存の組織・会議体はどのように整理されたのか、との質問に対して)配布資料の体制図はあくまでも機構に焦点を当てたものであり、政府関係の組織・会議体はスペースの関係で記載していないだけで、すべて引き続き存続している。政府関係の会議体で整理されたのは前述の「廃炉対策推進会議」のみである。

廃炉・汚染水対策関係閣僚等会議が政府の責任部局であり、これを支える実務部隊は変わっていない。たとえば「廃炉・汚染水対策チーム」は省庁横断の組織として存続している。

### ●国家プロジェクトとして進める

国が国家プロジェクトとして進める意図があるのかということについては、そのつもりだ。ただ国家プロジェクトを具体的にどのようにやるのかについては色々なやり方、ご意見がある。その中で政府・与党として今回のようなやり方を選んだ。すなわち技術的な戦略を作る部隊をしっかりと作る、廃炉に向けての実施そのものは東電に引き続きやっていただく、それをしっかりとサポートする部分と監視する部分の両方を強化しようということだ。

### ●事故が収束したとは考えない

国会などでの答弁で総理自身が明確に言ったことであるが、前政権が言ったような収束宣言という立場はとらない。やるべきことが山積しているという現状認識をした上で、廃炉に向かって全力で取り組んでいくというのがわれわれの立場である。安易に収束という言葉を使っていない。

### ●廃炉の費用を機構が出すのではない

機構が東電に対して行う資金交付の対象は損害賠償と法律に明確に書いてある。ただ除染などについては交付金を充てうるという解釈をしてきた。

他方、廃炉に関する費用は東京電力が自分で拠出する。機構が支援するのはあくまでも助言・指導と研究開発だ。負担金を東電の事故処理費用にあてるわけではない。廃炉部門にかかる出費として想定しているのは技術委員会の下で働く50人前後のスタッフの人事費とそれにもなる間接経費のみだ。

### ●東電を一体的にしっかりと監督する

ゼロから廃炉の機構を作るよりも原賠機構の業務に廃炉を付け加える方がベターだと思った最大の理由は、実施主体である東京電力を一体的に監督するのが望ましいと考えたからだ。別組織を作ってしまうと組織間で調整しなければならなくなってしまう。

### ●機構は汚染水対策も担う

機構の名称には「廃炉」の文字しか入っていないが、汚染水の問題も当然担うこととなる。

### ●機構の業務は戦略策定と研究開発である

日々のトラブルへの対応は政府もやっており、機構でやることは想定していない。機構の業務は、廃炉に必要な技術に関する研究開発と、それに基づく廃炉実施戦略の策定である。

### ●技術委員会の下に廃炉部門を置く

廃炉実施戦略を策定する技術委員会を置く。非常勤で月に1、2回会議を開く。その下に常勤で50人ほどの専門

家を集めた廃炉部門を置く予定だ。企業からの出向が多くなると思うが、その際、出身企業との関係をどうするかは論点としてある。海外の知見を入れることが望ましいと思っているが、その具体化は今後の検討課題だ。

### ●中期的な人員の確保は重要な問題である

機構と東電が協力して作成する特別事業計画には、どういう体制で廃炉を実施していくのかについて記載することを新たに求めている。これを政府がしっかりとチェックする。

### ●透明性が大事である

技術委員会の議論はしっかりと公開していく。

### ■檜葉町での住宅モニタリングは続いています

最近では5月20日（参加者伊藤邦夫、高城裕之、中村敏広、丸洋一、測定1軒）、6月3日（参加者は塙谷亘弘、熊谷訓行、伊藤勝芳、鈴木尚雲、測定1軒）、6月17日（参加者は伊藤邦夫、伊藤勝芳、熊谷訓行、平井秀和、測定1軒）に行ってきました。中村さんは香川県から、丸さんは愛媛県から参加して下さいました。

今年4月以降でも14軒の測定を行いました。檜葉町の合計は32軒になりました。現在測定しているのは除染済みの家です。除染前に測定した家もあります。この場合には同じ場所で除染前後の線量を比較することができます。檜葉町は来年4月に帰還する予定のようです。今後もモニタリングの申し込みは続くと思われます。皆様の参加をお願いします。（伊藤邦夫）



### ■映画『家路』によせて

杉山百合子

主役は、行動隊もお世話になっている川内村の大自然と農地。その深い迫力が印象に残ります。

実際に村で米作りを続けている秋元さんの大きな協力のもと、農家としての一家の姿が立ち現れます。だから風景になじんでる。母親役の田中裕子が、もう少し日焼けしたりシワがあった方がリアルだけどそこはしょうがない。内野聖陽はちょっとスマートすぎるかな。

言葉は少ない映画です。人間の方の主役、松山ケンイチが一番セリフが少ないのじゃなかつたでしょうか。だから彼が、義兄と、旧友と、母と、交わす言葉が残ります。

人の中で一番存在感があったのが安藤サクラ。全然違うことを語っているのだけど、あまり語らない松山ケンイチの代わりかな、と思うような言葉もあって、私としては一押しにしたいです。

「原発事故を扱った映画」というくくりで見られるのかもしれないけど、「ここで、生きていく。」このコピーがすべてです。

（映画館を出て、「なんでここで暮らしちゃいけないんだ、文句あるなら矢でも鉄砲でも持ってこい！」と、夜道に吠えてしまったのは内緒です。）